

耕し、守る

創世記 2 : 15

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを**耕し、守る**ようにされた。

And the LORD (→ יְהוָה Y'hōvāh, yeh-ho-vaw') God (→ אֱלֹהִים 'elōhîm, el-o-heem') took the man, and put him into the garden of Eden to ①dress it and to ②keep it (人をエデンの園に置き、それを耕させ、守らせました。).

① עָבַד 'abad, aw-bad'; 働く (あらゆる意味で); 暗示的に、仕える、耕す、(原因的に) 奴隷にする、など:—× である、束縛しておく、奴隷である、奴隷奉仕、強制する、する、服を着せる、聞く、処刑する、農夫、保つ、労働する人、起こす、(させる、仕える、自分に) 仕える、召使いである、奉仕をする、耕す、(限界から) 違反する、仕事をする、作られる

② שָׁמַר shâmar, shaw-mar'; שָׁמַר shâmar, shaw-mar'; 原始的な語根; 正しくは (イバラなどで) 囲む、すなわち守る; 一般的には保護する、注意を払う、など: 守る、用心する、注意を払う (自分に)、保つ (-er、self)、注目する、注意深く見る、観察する、保存する、考慮する、取っておく、救う (自分)、確実に、待つ (のために)、見張る (-man)。

この創世記 2 章 15 節では、神は人に「エデンの園を耕し、守る」使命を与えられました。これは単なる農作業ではなく、神の創造に参与し、責任をもって世を管理する働きを記しています。

また、「耕す」は仕えること、「守る」は配慮し大切にすること。つまり、私たちの働きや日々の生活も、神から委ねられた園を管理する行為です。

罪によってこの使命はゆがめられましたが、イエス・キリストによって人間の本来の務めが回復されました。

今、私たちもそれぞれの「園」(家庭・仕事・社会)を、誠実に耕し守ることが求められています。これらについて少し学んで行きたいと思います。

神は人間を土の塵から形づくり、命の息を吹き込んで生かされました。

初めに、神は天地を**創造された**(創世記 1 : 1)。

元始 (はじめ) に神天地を**創造 (つくり) たまへり** (文語訳[明治訳] 舊約聖書 1953 年版)

← 読み方 (右から左へ)

ハアレツ ヴェエツト ハーシャマイム エト エロヒーム (神) **バーラー** ベレシート (初めに)

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץ

Θεόπνευστος (ギリシア語)
 = theópneustos, theh-op'-nyoo-stos
 = given by inspiration of God
 = 神の靈感を受けて → 神が息を吹き込まれる

創世記 2 : 7
 主なる神は、**土 (アダマ) の塵**で人 (アダム) を形づくり、その鼻に**命の息**を吹き入れられた。人はこうして**生きる**
者 a living soul (文語訳: **生靈**) となった。
 → 者: נֶפֶשׁ nephesh ネフェシュ = 呼吸する生き物 = Psyche プシュケー (ギリシア語)

神の息、命

つち (土)

しんによろ (之繞) → 動きを表す

くち (口)

造

造語義 ① つく—
 ② はじ—まる、はじ—める

その直後に与えられたのが、「耕し、守る」という使命でした。

これは単なる農作業のことではありません。

人が神の創造した世界に対して果たすべき根本的な役割を表しているのです。

「耕す」とはどういう意味でしょうか。

原語では「仕える」「労する」という意味が含まれます。エデンの園は神が良いものとして造られた場所でしたが、それを放置するのではなく、人の手によって手入れされ、育まれ、さらに美しくされる必要がありました。

つまり、神は人に「共に創造に関わる者」としての尊い役割を委ねられたのです。

また、「守る」とは、単に物理的に保護するという以上に、「見張り、配慮し、大切にすること」という意味を持ちます。神の創造した秩序、自然、そしてそこに住むすべての命を大切に、持続可能な形で見守ることが人間に求められているのです。

私たちはこの人生において、しばしば、自分の働きに価値を見いだせず、意味を見失うことがあります。しかし聖書は、どんな働きも「神から託された園を耕し、守る行為」とであると語ります。

家庭を築くこと、職場で働くこと、地域を支えること 等々——これらすべてが、神から私たち人間に与えられた任務（召命、責務）なのです。

しかし、私たち人間は、罪（→ヨハネの手紙一 3:4 罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです）の結果として、この神様から与えられた使命を忘れしまい、耕すことを苦役とし、守ることを怠るようになりました。

現代における環境破壊、命の軽視、働くことの意義の喪失はそれを物語っているのかもしれませんが。

イエス・キリストはこの墮落した世界に来られ、もう一度人間が「神の園を耕し、守る者」として回復される道を開いてくださいました。

私たちはただの労働者ではなく、神の働きに共にあずかる者です。どんな小さな働きも、忠実に果たすとき、そこには神の栄光が現れます。

コリントの信徒への手紙一 9:23

福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。

今、私たちはどのような「園」を託されているのでしょうか。

家庭、職場、信仰生活、地球環境——すべては神から与えられた「耕し、守るべき場所」です。

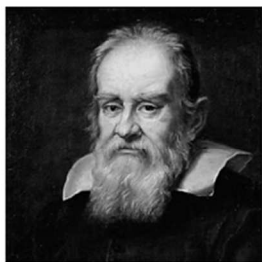
神は今も私たちをそこへ連れて来られ、「ここをよく耕し、守りなさい」と呼びかけておられるのです。

祈り

天の父なるお父様、あなたが私たちを生かし、この地に置いてくださったことを感謝します。

与えられた働きを喜んで耕し、与えられた人々と環境を愛をもって守ることができるよう、どうか私たちを導きください。あなたのご栄光が私たちの働きを通して現れますように。アーメン。

神は二つの書物を書かれた。一つは聖書であり、もう一つは自然そのものである！



1615 年に、ガリレオ・ガリレイ Galileo Galilei (1564~1642、イタリアの自然哲学者、天文学者、数学者) がトスナカ公国のクリスティーナ・ディ・ロレーナ大公妃への手紙の中に書いた言葉。

「神様は2冊の書物を与えて下さいました。その2冊の書物とは靈感によって書かれた聖書と被造物界です。この二つの書物を通して神は“自己啓示”を行っておられます。」

ガリレオ・ガリレイはコペルニクス Nicolaus Copernicus (1473~1543、ポーランドの天文学者、聖職者、医者) の地動説を観測によって実証し、科学革命を代表する人物となったが、異端として訴えられ、ローマ教皇庁による宗教裁判 (1616年、1633年) で有罪、終身禁固の罰を言い渡されました。